



Title	辻邦生『安土往還記』論：「孤独」と、「私」の「崩壊」
Author(s)	岡崎, 昌宏
Citation	語文. 2002, 78, p. 44-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69001
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

辻邦生『安土往還記』論

——「孤独」と、「私」の「崩壊」——

一 本論の課題

『安土往還記』は「展望」一九六八年（昭和四十三）一月号、二月号に連載され、大幅な加筆の後、同年八月筑摩書房より単行本として刊行された。

この小説は主な舞台が十六世紀末の日本に設定されている。それまで辻邦生は、一九六一年（昭和三十六）二月の『西欧の光の下』（「新潮」）を皮切りに、『廻廊にて』（一九六二年七月）翌年一月『近代文学』や『夏の砦』（河出書房新社一九六六年十月）などの作品を次々と発表し、優れた現代小説を書く作家として当時高い評価をうけつつあった。そのため、辻自身がエッセイに書いているように、なぜ歴史小説へと「転向」「後退」したのか、という批判が、この小説の発表当初からあったようである。⁽¹⁾ 実際これをいわゆる歴史小説として読んでいるらしい著作も存在する。⁽²⁾

その一方で、この小説はいわゆる歴史小説ではない、とする意見も先行研究には多い。しかしその理由は、たいてい十分な作品分析を経たのちに得られたのではなく、なかには〈主題からの探索〉⁽³⁾

岡崎 昌宏

という、辻自身が述べた方法にその根拠を安易に求めているものもある。⁽⁴⁾ そもそも、『安土往還記』がいわゆる歴史小説なのかどうか、ということでは、歴史小説でないとはいえない。⁽⁵⁾ だからこそ、現代的な問題を扱ったものだという読みを提示するには、作品の十分な検討が不可欠なのである。しかし残念なことに、歴史小説でないという根拠を示す点では、先行研究に説得力のあるものは少ないように思われる。⁽⁶⁾

また歴史小説ではないとしても、作中人物「尾張の大殿」⁽⁷⁾（作中では「大殿」の具体的な名前は明らかにされていないのだが）から容易に想像される、織田信長という歴史上の人物を安易にもちだしている研究が非常に多い。この小説が現代的な問題を扱ったものだとするならば、どこまで歴史上の人物を意識すべきなのだろうか。⁽⁷⁾

さらに、すべての先行研究に対して最も不満に思うのは、なぜかこの小説から「大殿」の生き方を抜きだして論じているという点である。そしてそれはたいてい、自己を抑えてただ一事に徹底する高貴な「大殿」（あるいは信長）の生き方を描いたものだ、とい

う論調であるといつていい。しかし『安土往還記』が、日本に渡來したイタリア人「私」によって、日本を去ったあとに友人に向けて書かれた手紙からなっていることを忘れてはならない。手紙を書いている現在、ゴアで「無為」に日々を過ごしている「私」は、日本滞在中に何かを「うしな」い、そのことについてだけ手紙に書くようにしているのである。

私のなかに、こうした空白感が起つたことは、いまだかつてないことだった。それだけに私は、現在、ただ私のうしなつたものについてだけ君に書いておきたい気がする。あるいはひよつとすると、それは私が地上に捜しあてた私自身だったかもしれないぬという気が、頭のどこかに残っているためなのだ……。(II)

「私」には手紙を書く明確な目的があり、それにあわせて手紙の内容も取捨選択されていると考えられる。さらには「私」の手紙なのだから、「大殿」も、その他の人物や事件も、すべて「私」の眼に映つたものしか我々は知りえない。とすればまず、「私」にとつて日本滞在がどういう意味をもっていたのか。「私」にとつて「大殿」は何だったのか。また、

そうなのだ、それにつづいた本能寺の炎上、大殿^{シニョウ}の死、壮麗な安土城郭の大火災、(略)——それはあたかも壮大な何ものかがひたすら崩れつづけているような日々であった。(略)／それは東方の一王国の体制が崩れさつていった音だったかもしれないが、しかし私にとっては、ほかならぬ自分自身が崩壊していた音に思えてならぬ。その後のこのゴアで過した無為の十数年がそれを証明するためにあつたとしたら、友よ、君はそれをわらうであらうか。君はそれをあわれむであらうか。(III)

このように、主に日本滞在中のことを順に書き記した手紙の最後に「私」が確信することとなつた、「大殿」の死とおとずれた自身の「崩壊」、「うしなつたもの」とは何だったのか。つまり「私」の考えを中心に手紙を順に読んでいくことが必要なのである。そう読むことによって、はたして「大殿」(織田信長)の高貴な「意志」に着目するだけかどうか、ということだけでなく、先の歴史小説にかかわる問題も明らかになるに違いない。

二 「私」の「生きる意味」と、「大殿」

日本に滞在する前から「私」は、つねに自分の「生きる意味」について考え、そして日本滞在中、「大殿」のもとで働いていたときに「満ちわたる生命」を感じる。

ただ私は、(略)九鬼水軍の五千人の将兵が夜明けの海にむかつて船団を乗りだすとき、少くとも私の心はかつてない充実を味わっていたとは言えるような気がする。私は帆のきしり、風のうなり、潮の色調の変化にも、刻々に満ちわたる生命を感じた。(III)

「私」が手紙に書いた自己「崩壊」、「うしなつたもの」とは、「私」がそれまで追求してきた「生きる意味」、あるいは「満ちわたる生命」を失つた状態をさすと考えられる。そこではじめに、「私」の「生きる意味」とは何だったのか、ということを考えたい。

まず「私」は手紙のはじめに、故郷ジェノヴァで妻とその情夫を殺害したことを振り返る。この事件は「私」の生涯にとって大きな転換点になつたといえよう。なぜなら、手紙のなかで「私」が自分の生涯や「生きる意味」について考えるときに、この事件以前に立

ち返ることがないからである。この殺害をきっかけに、「私」の人生は大きく変わらざるを得なかった。

私が（略）妻と、妻の情夫を刺し殺したとき、私はいささかの悔恨を覚えることなく、もしそれが私の宿命であるならば、なんとしてもそれに屈しまい、（略）と誓ったのだ。（略）もし私がそれを罪と感じ、法に服するとすれば、私が抱いた愛情といい、人間としての誇りといい、すべて泥土のなかに投げ捨てることになる。また同じようにして、私がそのような宿命の暗い力に支配され、その結果に、かかる行為を強制されたと信じれば、私の内なる自由も、激しい情念も、はじめから存在しないことになってしまう。私は愛の激情から妻とその情夫を刺殺した。しかもそれは私の自由意志により、私の自由な選択によって行なわれたのだ。（Ⅱ）

自分の「自由意志」を最上のものとし、それだけが自分自身を支配しているという姿勢は、殺害後ジェノヴァを逃れてリスボアへ渡り、乞食やこそ泥となったときも、さらにノヴィスパニアに渡って軍の指揮官となったときも、つねに自分を支える唯一のものだった自分の「意志」で乞食になり、「宿命」への挑戦のために行軍を続けた。時には滑稽なまでに、たとえば「道で石につまずこうが、駆者たちに身ぐるみ剥がれようが」（Ⅱ）、それは自分の「意志」だと考えるようにして生きてきたというのである。

私は妻を殺害した。妻の情夫を刺し殺した。だが、その瞬間、私はそれを悪とする道徳基準をも打ち碎かねばならなかった。こうして私は新しい道徳基準をつくったが、こんどはそうした新しい基準を支え通すために、私は自分のすべてを賭けなければ

ばならなかった。そこには人間の品位がかかっている。人間の意味がかかっている。私はそう感じた。私にとって、この支える意志のみが一つの生きる意味だったのである。（Ⅱ）

「私」の新しい道徳基準とは、妻とその情夫を殺害したことを是認する基準である。つまりこの基準とは、自分の「意志」を最上のものとする基準だといえるだろう。この基準を支えとおすことが、「私」の「生きる意味」だったわけである。

さて、長い航海生活を経て日本に渡来した「私」は、民衆に恐れられて「尾張の大殿」と出会う機会があり、以後「大殿」を観察し、その生き方考え方を賞讃する。その考え方とは、例えば

彼にとっては、理にかなうことが掟であり、掟をまもるためには、自分自身さえ捧げなければならないのだ。大殿はこの掟を徹底的に、純粹にまもる。（Ⅱ）

また、

大殿が言う「事が成る」という言葉ほど、彼の行動のすべてを説明するものはない。そして彼は、事の道理に適わなければ、決して事は成らぬ、と信じていたのだ。（略）大殿ほどに繊細な感情をもち、この兵法家として名人上手の道を極めるために、自らの感情をこえていった人を知らない。（Ⅲ）

といったものである。つまり「大殿」の態度とは、「事が成る」という自分の目的を達成させるために、慈悲の気持など感情を捨てて、「理にかなう」ことに徹する、というものである。こうした「大殿」の態度に接した「私」は、次のような感想をもつ。

私が「大殿」のなかに分身を見いだしたと言ったとしても、友よ、それを誇張とは受けとらないでくれたまえ。（略）私が彼

のなかにみるのは、自分の選んだ仕事において、完璧さの極限に達しようとする意志である。私はただこの素晴らしい意志をのみ——この虚空のなかに、ただ疾駆しつつ発光する流星のように、ひたすら虚無をつきぬけようとするこの素晴らしい意志をのみ——私はあえて人間の価値と呼びたい。(Ⅲ)

「私」と「大殿」においては、自分の「仕事」だけを中心に考えて、自分の決めたことを貫徹する、という強い意志が共通している。そしてまた、その目的のためには、「理にかなう」考えに徹底して従っている、という点も一致するものだといえるだろう。「私」も、常に頭のなかにある自分の理窟によって、道徳基準をたて、宿命や死と戦い、そして他者の感情や考え（たとえば殺された妻やその情夫の心情、あるいはホンデュラス行軍における部下の考え）を無視して、自分の「仕事」（自己の「意志」を最上のものとする基準を支えること）を守ってきたのである。この二つの共通点があるからこそ、「私」は「大殿」に感心し、彼を自己の分身とまで認識するようになったのだといえる。

さて、自身の目的のためには何もかも捨て、ただ「理にかなう」考えだけに徹して一筋にすすんでいく「大殿」の生き方は、手紙の書き手「私」だけではなく、多くの辻邦生研究者まで魅了してしまったようである。先行研究では、ここまでを読んで、自分の生涯を意味づけようとするこの「大殿」の生き方が素晴らしい。辻はこの高貴な「大殿」を描いたのだ、という論調のものが多い。そして「大殿」の死後「私」が「崩壊」したのは、素晴らしい生き方をする、自分より高貴な人物を失ったからなのだ、とでもいわんばかりのものまで見られる。

しかし「私」にとつて、「大殿」はあくまで「分身」にすぎない。「大殿」に出会うまでは一人で自分の「意志」を貫いて生きてきた「私」が、なぜ「分身」が死んだからといって、その後十数年も途方にくれているのか。これまでの研究では説明がつかない。

そこで重要になるのは、これまでになぜか全くといっていいほど無視されてきた、手紙の（すなわちこの小説の）後半部分である。ひたすら「大殿」の生き方を賞讃してきて、ともに働くことに「満ちわたる生命」まで感じた「私」であったが、ある事件以降、急に「大殿」にまわりつく「孤独」にばかり注目して手紙に書くことになる。

三 「孤独」と、「私」の「崩壊」

その事件とは、「大殿」の家臣、「荒木殿」の謀反である。善良な「荒木殿」が謀反を起こした理由とは、「大殿」の苛酷な命令に不信感を抱いた、というものであった。すぐに「私」は「大殿」の心を想像する。

私はすぐ大殿の心を思った。(略 私には、ただ彼の暗い顔が見えるだけだった。(略) それは強いていえば悲しみの表情に近かった。(略) 私はふと彼が荒木殿を愛していたのではないかと思った。そしてどこか大殿が呼びかけている声が聞えるような気がした。「老人よ」とその声は言っていた。「なぜお前はおれに叛くというようなことをしたのだ。(略) お前は、おれを冷酷な男と思っている。残忍な男と思っている。(略) なるほどおれは、お前が助命を申しでた者を赦すことはなかった。(略) だが、いつかお前に話したように、それは温情によって合戦の厳しさ、神聖さをけがしたくないからなのだ。ただ一人、この暗い虚空

に立つて、自分を支えているのだ。(略) いいか、老人よ、荒木老人よ、人間は、温情を与えることで下劣なものに成りさがることがあるのだ。(略) いいか、おれは血をいたずらに求めているのではない。おれの求めるのは、人間の極みに達する意志なのだ。完璧さへの意志なのだ。」(Ⅲ)

ここで「私」は、自分の「仕事」において必要な「理にかなう」ということに徹底して従う、そしてそのためには自己の感情を超えなければならぬという、「完璧さへの意志」が、「荒木殿」の理解を得られなかったのだと想像している。「私」は、自己の生き方や考え方が理解されないためにおこる「大殿」の「孤独」を意識するようになるのである。

さらに、同じように苛酷な戦略を実行しえなかった家臣の「佐久間殿」を追放するという事件がおきた後、「孤独が大殿その人のこころを深く犯しはじめたような気がしてならない」(Ⅲ)と感した「私」は、やがて次のような認識をすることになる。

しかし大殿の顔に刻印された苦悩の表情は、そうした外部から来たものではなかった。それはむしろ内部から——大殿自身の生き方から、うまれているように見えた。(Ⅲ)

さらに次の引用。

大殿は「事が成る」ために自分のすべてを——自分の思惑、感情、情性、習慣、威信、自尊心までを犠牲にした。そしてそうした態度をあえて他の武將、將軍、大名などにも要求した。このことに関しては、大殿は徹底的な献身を要求した。「事が成る」ため、誰もが自分を殺し、自分をのりこえ、「理にかなう」方法を遂行しなければならなかった。／私が大殿のなかに見た苦悩

の刻印は、一方では、自分のなかのこうした不断の克己、不断の緊張の結果だった。が、それは同時に、そうした苛酷な要求が次第に周囲に畏怖をうみだし、その畏怖のため、人々は大殿に近づくことができず、そこにおのずと孤独の黒ずんだ影が生れていったという事実を、物語っていたのである。(Ⅲ)

誰もが自分を殺し、自分を犠牲にして、「理にかなう方法」を実践しなければならぬ。こうした苛酷な自他への要求が、「大殿」の「孤独」や「苦悩」の原因であると「私」は考えているのである。

そしてついには、「大殿」にとっても「私」にとっても最大の事件、「明智殿」の謀反がおこる。「明智殿」は、「大殿」も賞讃するほど、彼の考えを実践してきた家臣であった。今度は「私」は逆に、謀反をおこした側の、「明智殿」の心情を想像する。

明智殿はその冷徹な理知のゆえに、大殿にまさるとも劣らぬ戦略の苛酷さをあえて遂行しえたが、同時に、佐久間殿のような武將の温厚さ、手ぬるさに対して必ずしも大殿と同じ考えであったとは思われない。むしろ同情的であったかもしれない。(略) その人間的な弱さを愛していたのではなかったであろうか。／明智殿にとって佐久間殿の追放が他の重臣たち以上に暗い衝撃と受けとられたのは、(略)彼のこうしたささやかな人間愛に対して、容赦ない否認の断が下されたからでもある。(略)／だが明智殿のこの冷徹な理知の眼ざしが——この氷のような虚無の中で一人だけの力業が——その極限を意識しはじめたとしたら、それはまさに、荒木殿、佐久間殿の事件のさなかだったのではあるまいか。彼はその孤独の極限を支えきれない自分を感じた。彼はただその孤絶した高みに自らを保ちつつけるのに疲

れはてた。もはや自分で自分を支えつづけるのに疲れはてた。彼は自分をさらに高い孤独の道を辿るように促がす一つの眼を感じた。この眼が鋭く自分をみているうちは、自分は休むことができないのを感じたのである。(Ⅲ)

つづけて「私」は、謀反直前、最後に「明智殿」を見かけたとき「武田軍団」を壊滅させ、凱旋してきたときの模様を思いおこし、また彼の心を想像する。長いが引用しておきたい。

しかし私がいまでも忘れられないのは、そのときの明智殿の顔の暗さである。それは周囲の歓声や笑いや叫びと較べて、あまりに対照的であつた。それは憂鬱な、暗澹とした、物を思いつめる表情であつた。彼は時おり、驚いたように、自分の周囲をながめ、歓声の波がゆれ、人々が踊ったり、歌ったりするのを眺めていた。／そのとき、彼はこんなことをおそらく考えていたのだ。／「彼らは、ああして踊ったり、飲んだり、愛しあつたり、歌つたりしている。(略)彼らには自分を追いつたてゐるものはない。その日その日が泰平にすぎて、春のつぎに夏が、そして夏のつぎに秋がきて、やがていつか冬となり、短い赤い夕日が沈むように、彼らの生命も消えてゆく。彼らが眠るとき、その眠りはどんなに深く甘美なことであらう。夜半の風の音に耳をすませ、遠い馬蹄にも心を許すことのない我々の夜とは、まったく違ふのだ。おれもひたすらいまは眠りたい。深い甘美な眠りにつきたい。疲れはて、氣力も尽きはてたのだ。だが、おれを見つめている一つの眼がある。(略)それは共感の眼なのだ。ひそかに深い共感をこめて、おれを高みへと駆りたてる眼なのだ。この眼がおれを見ているかぎり、おれはさらに孤独な虚空

へのぼりつめなければならぬ。名人上手の孤絶した高みへと。しかしおれにはもはやこれ以上のぼりつめる力はない。ああ、おれは眠りたいのだ。ひたすら甘美な深い眠りのなかに落ちてゆきたい。(略)(Ⅲ)

ここで注意しなければならないのは、「私」が「明智殿」とほとんど面識がなかったということである。

私が明智殿とも羽柴殿とも深い関係を結ばなかったのは、いま思えば不思議である。明智殿に関して憶えていることといえば、

(略) 彼がラテン語の書物を手に入れて貰いたいとオルガンテイノに頼んでいたのを見て、おどろいたことくらいである。(Ⅲ)つまり、先に挙げた「明智殿」の心のうちに対する「私」の想像は、まったく根拠のないものなのである。とすれば逆に、先に引用した根拠のない「明智殿」の心情の想像部分にこそ、「私」自身の心情が反映されている、と考えるべきであらう。

そこであらためて「私」の想像している内容を考えてみたい。ここで結局「私」は、「明智殿」の謀反の原因を、「荒木殿」や「佐久間殿」の人間愛が否定されたことによつて、「大敵」的な生き方の限界を意識したからだ、と想像しているようである。そしてこれはすなわち、こうした想像をしている「私」自身が、「孤独の極限」をうみだす「大敵」的な生き方、すなわち、目的を達成するためには「理」にかなう「こと」に徹底して、自分の感情を殺してまでも従う、という生き方に限界を感じた、ということに他ならない。

ここから、「大敵」の死、「大敵」の体制の崩壊が、「私」の「崩壊」になった理由をあげることができる。それはつまり、「大敵」のやり方では、自分の感情を殺さねばならず、そのために癒しようのない

「孤独」を生んでしまうのだと、「私」が気づいたことからきている。

「私」は、「大殿」の生き方、考え方、「意志」を高く評価してきた。そして「大殿」を「分身」とみなしたように、自分自身も自分の意志だけをみつめて、「理」にかなうことに従って生きてきたといえる。

したがって「私」は、「大殿」にまわりつく「孤独」に注目したことを契機として、最終的には「明智殿」の謀反によって、「大殿」や自分の生き方、考え方の限界を確認した、ということになる。同じ「理にかなう」ことに従ってきた「名人上手」である「明智殿」が謀反をおこしたことは、「私」にとつて衝撃であつたに違いない。

そして限界を確認した、ということはずなわち、それまでの自分の「生きる意味」と、これまでの歩みとを否定することに等しい。つまり「私」は、自分のかつての「生きる意味」や生き方を否定し、失ってしまったのである。だからこそ、「大殿」の体制の「崩壊」が、すなわち「私」の「崩壊」となってしまったのである。以下、「私」の「崩壊」とは何だったのかということをもう少し考えたい。

四 「私」の「崩壊」の意味

彼が神仏を信ぜず、偶像を軽蔑し、眼に見えるもののほか、何も信じないというのは、なにより、彼が理にかなつたことのみに従うという証拠ではないか。(II)

作中、「理にかなう」考えに従ってきた「大殿」、「明智殿」、そして「私」の三人だけは、信仰心のないことが明確にされている。逆にいえば、宣教師たちとは違つて神を信じないという立場だからこそ、「理にかなう」という、人間（あるいは自己）を基盤とした合理的な判断、客観的な認識にすべての基準を見出すことができるのだ

と考えられる。右に引用した「大殿」だけでなく、自分の「自由意志」を最上のものとする「私」の思想も、まぎれもなく自己を基盤とした、自己中心的な考えのあり方だといえる。そして、自己中心的な判断を下す人間が、例えば次の引用（「私」が日本に来る前、ホンデュラスで指揮官をしていた頃の記述）のように他者の感情や考えを無視し、自分の「仕事」だけに固執するということは容易に想像できる。

部隊の半数が熱病に冒され、あるいは沼のなかに沈み、あるいは叢林のなかへ頭を突つこんで死んでいっても、私は部隊を引きかえすことはしなかつた。私にはそれが自分の運命への挑戦だと感じられたからだ。(II)

さて、「事が成る」ために「大殿」がとつた方法は、自己を基盤としてすべてを客観的にながめ、「理にかなう」もののなから自分の固執する「仕事」のために役立つものだけが必要とする、というものであつた。

ただそのいかなる場合にも、大殿は「事が成る」という見地からのみ、問題をながめた。(略)大殿はこうした現実の問題を処理する立場の人間として、たえず「事が成る」ための力を必要としていた。事を成就せしめぬような知識はがらくたにすぎなかつた。(III)

こうした方法のもとでは、人は、ただ役に立つか立たないか、というこのみで判断される。「大殿」が「羽柴殿」や「明智殿」を「名人上手」と賞讃したのも、「佐久間殿」を追放したのも、こうした判断に基づくものである。客観的な認識が徹底して最上のものとされる以上、「大殿」も含めてすべての人の人間性や感情といったものは、

無視されるべきものに違いない。イタリア人の「私」が限界を感じた「孤独」とは、まさしく他者の感情を無視する、という態度が周囲に理解されないことからくる「孤独」である。そして同時に、「理にかなう」考えに徹することと、「大殿」自らが人間性、感情を失い陥っていく「孤独」であるともいえるだろう。

これまで「孤独」から「私」の「崩壊」の原因を探ってきた。ひとことというならば、「理にかなう」考えに徹することからおきた、人間性の疎外である。人間（自己）を基盤とした客観的認識の弊害を、「私」は「孤独」というかたちで意識したといえるだろう。⁽⁸⁾「理にかなう」考えに従い、自己の目的に固執し、すべてを役に立つかどうかで判断するという仕方では、人間性の疎外された、「孤絶した高み」へとのはりつめるしかない。そこには「私」の記しているように、「深い甘美な眠り」などは存在しないのである。

妻とその情夫を殺害後、「私」は自己の「自由意志」「道徳基準」を最上のものとしてまもることを唯一の「生きる意味」としていた。自己中心的に、すべてを「理にかなう」考えのもつて処理してきた。「私」が手紙に書きたかった「うしなつたもの」とは、そうした「大殿」⁽⁹⁾と共通する生き方のことだと考えて間違いないだろう。「私」の「崩壊」、それはまた、「理にかなう」ことに終始従い、自己の感情を殺し、他者の人間性を無視する、自己中心的な「大殿」⁽⁹⁾の生き方の「崩壊」であるともいえるよう。

はじめにこの小説（Ⅱ手紙）が、単に「大殿」⁽⁹⁾の高貴な「意志」に着目するだけの読み方で足りるかどうか、という疑問を述べたが、その答えはすでに明らかになったと思う。この手紙は、「私」の「生きる意味」が「うしな」われたこと（Ⅱ「崩壊」）を友に書き送ろう

としたものである。そして手紙を書いているうちに、「ひよつとすると」「私」の日本で「うしなつたもの」が「私自身」だったかもしれないとすでに感じていた自己の「崩壊」を、手紙の最後に「自分自身が崩壊していた音に思えてならぬ」と、よりはっきりと確認することになった。『安土往還記』は、高貴な「大殿」⁽⁹⁾の生き方が「私」によって賞揚される物語ではなく、逆に「私」が、自分の、あるいは「大殿」のような生き方に、限界を感じて「崩壊」した物語なのである。

五 ま と め

以上のような検討を経ると、「私」の抱えた問題が、現代に生きる我々にも通ずる問題であることが容易に理解できる。現代にもっとも深く浸透している、人間中心的な科学的、客観的認識の弊害を意識せずにはいられない。辻邦生研究者の多くが「大殿」⁽⁹⁾の姿勢に魅せられてきたのは、まさに客観的認識が現代人の考えや行動の中心のものになっていくからに違いない。また「私」の「生きる意味」も、一個人の自律性——他者の命に従わず、自らの意志で客観的な道徳基準をたてて、これに従うこと——だけで生きていくとするものである。「私」の「崩壊」は、そうした自律性だけでは生きていけなかったことを示すものである。

こうした問題を考えるとき重要なのは、「大殿」⁽⁹⁾が織田信長だ、ということではない。注目すべきは、「大殿」⁽⁹⁾の生き方や考え方である。もちろん織田信長が簡単に想像されるわけだから、新しい信長像などではない、といえることはできない。歴史小説としても十分に楽しみうる小説であるともいえる。だが、この小説を、「私」を中心

により詳細に検討するとき、単純に歴史小説としてとらえるだけではすまない問題が存在することは明らかである。辻邦生が歴史小説へと「転向」あるいは「後退」した、という批判があたらないのも、もはやいうまでもない。この小説は、「大殿」や「私」といった一個人の抱える現代的な問題が、歴史の舞台をかりて描かれたものなのである。

われわれ読者が魅了される「大殿」の生き方では、生の充実感を得ることができないのを「私」は知った。ではどうして生きていけばよいのか——それは、ゴアで十数年も「無為」に日々を過ごす「私」をみつめながら、現代のわれわれが考えるべき問題だといえるのかもしれない。

辻邦生の諸作品は、まず個々において十分な分析がなされる必要がある。そうした読みを経てこそ、辻文学の「精神性の高い」世界を、そして「生きる喜び」⁽¹⁾を求める一貫性を、感じとることができるのである。

注

(1) 辻邦生「歴史小説の地平」(『岩波講座世界歴史』第十巻月報、一九七〇年六月。のち『辻邦生歴史小説集成』第十二巻、岩波書店一九九三年十月などに収録。引用は後者より)に、次のような文章がある。「私が『安土往還記』を書いたとき、人からしばしば、なぜ歴史小説に転向したのか、と訊ねられた。(略)いよいよ歴史のなかに後退したという印象を与えたい。」(傍点は原文、以下同じ)

(2) 尾崎秀樹「大殿の意志」(『海の文学』白水社一九九二年八月)など。
(3) 「主題からの探索」とは、辻邦生が「主題からの探索」(『文藝界』一九六八年六月。のち『辻邦生作品』全六巻、6、河出書房新社一九七四年一月などに収録。引用は後者より)などに述べている創作方法で、「私は現在まで、何か新しい素材にぶつかって、それを作品化するというよ

うな方法はとらなかった。つねに主題の側からのみ、その具体化のための媒体を求め、それがたまたまある形式なり、地方・出来事・人物なりとなるのだが、こうした方法はおそらく今後とも変らないと思う」というものである。辻作品を考える上で極めて重要な文章である。しかだからといって、辻がこう述べているから、歴史は主題を具体化する舞台にすぎない、歴史小説ではないのだ、と単純にすませてしまうことには問題がある。

(4) 源高根「安土往還記」について(『国文学』一九七四年一月)

(5) 参考までに、遠藤周作との対談「歴史と現代文学」(『文藝界』一九七三年二月。のち辻邦生「灰色の石に坐りて」中央公論社一九七四年七月に収録。引用は後者より)から辻の発言を引用しておきたい。「略」しかし歴史の素材に関心することは事実ですね。まったくそうじゃなければ、別の素材を使ってもいいわけですから。使っている以上は、歴史小説という責任を負わされる……というのはへんない方だけれども、「歴史小説」というレッテルを貼られても仕方がないし、(略)」

(6) ただし、饗庭孝男氏は「解説」(『安土往還記』新潮文庫一九七二年四月)のなかで、簡潔に根拠を示しつつ、「安土往還記」が「歴史という枠をかりながら、中心の喪失に苦しむ現代人に一つの指標を与えようとする」ものだ指摘し、「いわゆる歴史小説」ではないとしている。本論と論旨は異なるが、根拠を示したうえで、この小説が現代の問題を扱ったものだ指摘していることは重要であり、その意味で他の「安土往還記」論とは区別する必要がある。

(7) 先行研究の多くが歴史上の人物・織田信長をよくもちだす背景には、次に引用する辻のエッセイの影響もあることと思う。「さらに私は、日本史の文脈の中にある信長を、何とかして十六世紀にひろがりはじめた世界的視図の中に置きなおして、新しい「信長像」を創造したかった。」(『私の取材ノート②耶蘇会士通信とともに』(『読売新聞』一九七二年二月十五日)のち「歴史のなかのロマネスク」と題し『辻邦生歴史小説集成』第十二巻(岩波書店一九九三年十月)などに収録。引用は後者より)この部分は、「安土往還記」を歴史小説と読む根拠にはなろうかもしれない。しかし歴史小説でないとする論者が、この部分を受けて織田信長を安易にもちだすとなれば問題がある。辻の文章に注意を払うのなら、むしろ先の引用につづく部分を検討すべきである。「そのため私は、この信長小説の主人公に名前を与えず、たえず語り手に「大殿(シニョレ)」とのみ呼ばせた。だれの眼にも信長とわかりながら、あえてそれを信長

と呼ばれるのは、(略)そこに一種の空白の輪廓だけを描いておくようなもので、それを埋めるのは、作品の中から読者が自分で感じたこの人物の内実である。おそらくそれによって読者は、既成の信長ならぬ、一個の新しい人物を獲得するのではないか——そんな気がしたのである。」篠田一士氏は、「人と文学」(筑摩現代文学大系八七 北杜夫・辻邦生集、筑摩書房一九八一年十二月)のなかで、この辻のエッセイにふれながら、「大殿」を信長と考えることを否定している。

(8) 本論では詳しく検討しなかったが、「私」の「崩壊」原因は、もうひとつ存在するのではないかと考えている。自分の「自由意志」で行動してきた「私」は、「大殿」の組織の「歯車装置の二つ」になることで、「満ちわたる生命」を感じてしまった。「歯車」にとつて、それをまわす「大殿」が死んでしまえば、ただの役に立たない部品になってしまう。そこからくる「崩壊」である。これも突き詰めれば同じ原因であるといえよう。つまり、「理にかなう」ことに徹することによって、人間性を必要とされない多数の「歯車」が生み出されてしまう、ということである。「理にかなう」ことに徹することからおきる人間性の疎外である。また、「私」が「歯車」になって満足する背景には、もともと「私」が理想とするものの下につきたいという願望があったことがあげられる。ともかく、このもうひとつの「崩壊」原因については、機会があれば今後考察する場を設けたい。

(9) ただし「私」は、賞讃する「大殿」とともに働くよりも、宣教師「オルガンティノ」への友情を重視する態度をみせている。このように、自己の感情を殺しかねた、むしろ重視した「私」だからこそ、自分の生き方の限界に気付いたともいえるかもしれない。詳しい検討は今後の課題としたい。

(10) 「朝日新聞」一九九九年七月三十日朝刊(二九面)、辻邦生死去関連記事より。

(11) 「毎日新聞」一九九九年七月三十日朝刊(二面)、「余録」より。

〔付記〕本文の引用は岩波書店刊『辻邦生歴史小説集成』全十二巻中の第一巻(一九九三年六月)に拠った。

また本論は、大阪大学国語国文学会(二〇〇二年一月十二日)における口頭発表に基づき、加筆・訂正を施したものである。

発表に際し、先生方ならびに会員諸氏に貴重なご意見をいただいた。ここに記して深く感謝の念を表したい。

—— 本学大学院博士後期課程 ——